

オラニエ・ナッサウ家 (「[ユトバンク](#)」)

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

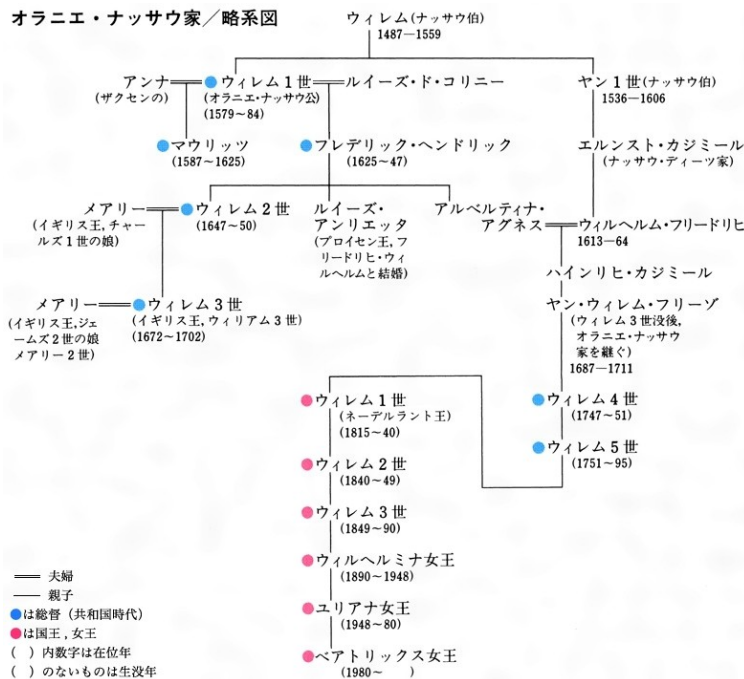
オラニエ・ナッサウ家

het huis van Oranje-Nassau オランダ語

オランダの王家。南フランスのプロバンスにあるオランジュ (オランダ語でオラニエ、英語でオレンジ) 公爵領は、16世紀初頭、結婚によりネーデルラントの名門貴族ナッサウ伯家の領土になった。**ナッサウ伯家はドイツの貴族で**、その起源は12世紀初頭にさかのぼるが、14、15世紀の間にネーデルラントに多くの所領を増やし、ブルゴーニュ家、**ハプスブルク家の重臣**として仕えた。16世紀後半、ネーデルラントの住民はスペイン国王フェリペ2世の統治に対して反乱を起こし、ネーデルラント連邦 (オランダ) 共和国として独立するに至ったが、1572年**オラニエ公ウィレム1世** (1533—84) は反乱諸州に推されて総督となり、反乱を指導して**建国の父**となった。ウィレム1世が暗殺されると、息子マウリッツ、続いてフレデリック・ヘンドリックが総督職を継ぎ、共和国の最高軍事指揮者として対スペイン戦に功績を表した。**1672年総督に就任したウィレム3世は、イギリスの名誉革命**によって妻メアリーとともにイギリスに迎えられ、**イギリス王ウィリアム3世** (在位1689～1702) となり、ホラント州などの総督も兼ねた。

ウィリアム3世が嗣子(しし)なくて没すると、**分家のナッサウ家がオラニエ家を継いだ**。同家の**ウィレム4世**は、1747年に共和国7州すべての州総督を兼ね、同時に**総督職はオラニエ・ナッサウ家の世襲**となった。1795年共和国はフランス革命軍の侵入により崩壊し、総督ウィレム5世はイギリスに亡命した。**1815年のウィーン会議によりネーデルラント (オランダ) 王国が成立**し、オラニエ・ナッサウ家のウィレム6世は新国王ウィレム1世となり、ルクセンブルク大公を兼ねた。ウィレム1世ののち、同2世、3世を経て、ウィルヘルミナ、ユリアナ、現**女王ベアトリックス**と女王の統治が3代続いたが、1967年ベアトリックス女王に男児が誕生、1世紀ぶりに皇太子オラニエ公が出現した。 [栗原福也]

オラニエ・ナッサウ家／略系図



オラニエ・ナッサウ家／略系図